

ジャリル マリア（愛知県日進市立西小学校六年生）

「泰平の眠りをさます上喜撰（蒸気船） たった四はい（四隻）で夜もねむれず」という幕末の有名な短歌があります。この短歌の表向きの意味は、上喜撰という高級な抹茶はカフェインが多いため、たったの四はいで夜もねむれないという意味です。しかし、この短歌の本当の意味は、今までの鎖国を泰平の眠りと表し、蒸気船（黒船）がたった四隻来航しただけで、ねむれぬほどの大混乱がおこったことを表しています。このように、日本語と歴史は深く関わっています。

私は歴史が大好きです。とくにその時代を表す短歌や詩が好きです。日本語は、短い言葉ですべてを語る事が出来るのです。すごいと思います。役人にムチでうたれながら働かされる苦しみ、すべてが自分中心に動くようになってよろこび、戦ですべてを失った悲しみなどの多様なことを短く、簡潔にまとめることが出来るのは日本語ならではの技術だと思います。言葉に万能なものはありませんが、日本語は言葉の中では特に表現にすぐれているはずす。

しかし、先ほど述べたようなすぐれた日本語は、意欲をもって勉強しないと身につかないと思います。日常の会話は気づけば身についており、心から考えたことのない言葉は、現実を短く、そして鏡のように正確に写すことはできません。だから、私は文章を書く時は心からあふれてくる言葉をそのまま書きとめるようにしています。そうすると、自分で文章を書いていて楽しいからです。自分が書いていて楽しいものはきつと他の人が読んでもきつと楽しいからです。そしてバラバラにこぼれ落ちた「心の破片」をいかに上手にまとめるかだと思います。あとは、もう一度心とこれでいいのかを相談すればいいはずす。

このように、心と向き合えば、自然とその心を語る日本語とも真剣に向き合うことができると思います。昔の人もきつと、自分たちの心の声をききながら、詩を書きとめていったんだと思います。そして、その真っ直ぐな心が、他の人々の心にしみわたって今も残っているんだと思います。そして、真剣に日本語と向き合った歌は、きつと未来でも学ばれつつけるにちがいありません。